

優しい手に守られたい

目次

優しい手に守られたい

番外編 温泉旅行

261 5

優しい手に守られたい

男の人が苦手だ。

触れられただけで寒気がするレベルなので、恋愛は諦めている。それなのに恋がしたい、なんて思ってしまった。

「疲れてる……」

眩いたひとり言は、店の喧騒にかき消される。

相馬可南子は、結婚式の三次会会場である立ち飲みのレストランにいた。

雲ひとつない秋晴れの今日、新入社員の頃からお世話になって先輩、瀬名結衣の結婚式に列席した。新婦を見つめる新郎の優しい目。それを見上げて微笑む新婦。二人を慕う参列者が温かい雰囲気醸し出す、とても良い式だった。結衣の美しい花嫁姿を思い出すと涙ぐんでしまう。

いつもなら二次会さえも参加しない可南子も、今日は三次会まで参加していた。主役二人は二次会後既に帰宅しているが、未だ会場に漂っている幸せな空気を味わい、二人を羨んでいる。

恋なんて、男の人に触れられるだけで怖いことから、まず無理なのに。

そんな気持ちを誤魔化そうと口にしたお酒は甘くて、ごくごく飲めた。今は酔いの浮遊感の中に

いるのに、どうにも酔っている感じがしない。

「飲みすぎてない？ 大丈夫？」

「大丈夫。ありがとう」

可南子を三次会に連れてきた張本人である、同僚の井川早苗に可南子は笑んだ。

小さな靴に圧迫された足は、だいぶ前から温かいお湯と強めの指圧を欲している。可南子は、もうそろそろ帰れるかな、と同じテーブルで恋をはじめようとしている早苗と、彼女の想い人を見た。早苗は結婚式で、新郎の後輩に一目惚れをしたらしい。彼について何ひとつわからないまま二次会が終わってしまった為、三次会参加者を募られたとき、早苗は可南子の腕をむんずと掴んで勝手に挙手した。一人で近づくのはあからさまに狙っているみたいで、嫌だとか何だとか。可愛い印象を保ちながら近づきたい、という計算高くもいじらしい熱意に、可南子は負けた。

そして、お互いを探り合う甘い時間を見せつけられること一時間近く。ようやく新郎の後輩は独身で、彼女募集中だと判明した。

わざとらしくスマートフォンを弄った後に、可南子は二人に向けて微笑む。

「ごめんなさい。私、電車の時間があるから帰るね」

「あ、遅くまでつき合わせてごめん」

手を合わせて早苗が謝る。けれど、一緒に帰る気はないらしい。早苗の恋への素直さが羨ましく、眩しい。残りのお酒を一気に喉に流し込むとカラン、と氷が唇に触れた。

「ちよっと今日は飲みすぎてるよね。一人で帰れる？ 大丈夫？」

可南子がお酒に弱いことを知っている早苗が、さすがに慌てる。

「帰るだけだから、大丈夫」

せめて駅まで送ろうかという申し出を断って、財布からお金を出し、早苗に渡した。そして、引き出物の入った紙袋を持ち、新郎の後輩にべこりと会釈をすると店の出入り口に向かう。

帰ってシャワーを浴びれば、恋への複雑な想いも収まるはずだ。早く一人になりたいくて、歩幅が自然と大きくなる。

しかし、歩いてみると足元が覚束ない。じつとしていたときは気づかなかったが、酔いがかなりまわっていたらしい。帰れるか不安に思いながら店の硝子張りのドアに手を掛ける。

ふと視線を感じて顔を上げると、その扉の向こうに新郎の真田広信がいた。

何故、夜十一時の三次会に新郎が。広信も可南子を見て、目を大きく開けて驚いていたが、すぐに扉を開けて入ってきた。彼は白のタキシードを脱いで、シャツとジーンズという出で立ちだ。

店員のいらっしやいませの言葉と、店内の新郎友人が広信を見つけて歓声を上げたのはほぼ同時だった。広信は歓声に手を上げて応えてから、心配そうに可南子の顔を覗き込んだ。

「かなちゃん、こんな時間までどうしたの！ あれ……お酒、飲んでるね。けっこう、飲んだ？」

広信は、可南子の赤く染まった肌と、とろんとした瞳を見て顔を顰める。

「少しだけですよ」

「うーん。お酒に弱いつて、本当だったんだね」

彼とは可南子がまだ新人社員の頃からの付き合いで『かなちゃん』と呼ばれるほどに親しい。

「広信さんこそ、何故ここに」

「ああ、三次会するって聞いたから、顔は出しておこうと思って。で、かなちゃんは今から帰るのか」

「はい。帰ります」

広信はどこか親しみを感ぜさせる、柔和な雰囲気をもとっている。容姿が整っているのに、それを鼻にかけるわけでもなく、とても付き合いやすい。しかし、こちらをしっかりと見据える大きな目は、ただ優しいだけではなく深い知性を窺わせた。

先輩の彼氏ということもあり、男の人が苦手な可南子でも大丈夫な数少ない相手だ。

「広信さん、もう遅い時間ですよ」

語弊があるかもしれないが、今日は花嫁を一人きりにしてはいけない日なのではないだろうか。

「大丈夫だよ。ちゃんと花嫁の所に帰るし、頑張ります」

広信は顎を指でこすりながら、平然と言つてのける。可南子は新郎が何を頑張るのかを想像して、顔を真っ赤にしてしまった。

しかも急に人肌が恋しくなつて、心の中で頭をぶんぶん振る。こんなに変なことを考える自分はやっぱりおかしい。タクシーを使つても早く帰ろう。

「それにしても、こんな時間までかなちゃんがいるとは……。あ、亮一！」

にやりと口の端を上げた広信の表情がとても楽しそうに見えたのは、酔いのせいだろうか。

彼が友人の名を呼んだのを聞いた可南子は、「今日はおめでとございました」と小さくお辞儀

をして、その横を通り過ぎようとした。

「待って待って、送らせるから」

「え」

そう言った広信はにこにこして、居場所を知らせるように手を上げる。可南子は彼の視線の先を見た。そして、こちらに歩いてくる男の人に思わず「あ」と声を出してしまう。どこか人を近づけない雰囲気だが招待客の中で一番の男前、志波亮一だった。

女の子に話しかけられて冷静に対応をしていた姿と、舞い上がった彼女達との温度差が印象的で、よく覚えている。

「一人で帰れます……」

広信は可南子の訴えに、笑顔のまま首を横に振った。

亮一の背の高さと筋肉質な体は人目を引く。上がり気味の眉の下に、切れ長で二重の目。すっと通った鼻筋、くつきりした上唇に、少し厚い下唇。短くて硬そうな黒髪は立ち上げてセットされていた。

意思の強そうな黒い瞳は女心を掴む何かを持っている。鍛えられて引き締まった彼の体躯を披露宴会場で見た瞬間、壁みたいだと思ったことは、本人には言えない。

その亮一が傍に来て、可南子は圧迫感に半歩下がる。

亮一は後ずさった可南子をちらりと見た後、ムスツとした表情で広信に「なんだ」と短く言った。明らかに不機嫌そうな態度に緊張してしまう。

二次会会場で結衣と会社の先輩達が、亮一は三次会には来ないと話をしていたはずだ。そのせいではほとんどの女の人は帰った。結果、三次会の新婦側の招待客は早苗と可南子の二人になったのだ。「亮一、こちら、相馬可南子ちゃん。お酒で足元がふらついているから送ってあげて。かなちゃん、これ志波亮一。僕の大学時代からの友人で、会社の同僚で、結衣の幼稚園からの幼馴染。亮一は新婦側の席に親族扱いでいたレベルだから、信用できるし大丈夫。送ってもらって。あいつらにはうまく言っておくよ」

こちらに興味津々の視線を送ってくる会社の同僚を親指で差し、彼らのテーブルへと足を踏み出した広信に、可南子は焦る。

「あの、広信さん、本当に一人で帰れます！」

披露宴会場での、亮一の女の子への対応からして、とてもお願いできるような人には思えない。彼は笑んでいたが、目は全く笑っていなかった。あんな目で見られたら耐えられない。

「……広信」

亮一はその体で、広信が先に進むのを防いだ。危険な雰囲気を感じて、可南子はびくびくしながら二人を交互に見る。きつと亮一は送るのなんて煩わしいのだろう。原因は明らかに自分だから、気が気でない。

「亮一がかなちゃんを見て、一人で帰れそうだと判断するならいいけど。じゃ、これで。亮一、頼んだよ」

笑顔を崩さずそう言って、さっさと人の輪の中に入ってしまった広信に、可南子は呆然と立ち尽

くした。

斜め横にいる亮一をおそるおそる見上げると目が合った。彼は可南子の顔を数秒見て、小さく溜息をつく。それから、可南子が握り締めていた引き出物の紙袋をひよいと取り上げた。

「あ、持てます」

「とりあえず出よう」

そういえば、ずっと店の出入り口を塞いでいる。

「すいません、迷惑を掛けてしまつて」

慌ててべこりと礼をして頭を上げたとき、ぐらりと体が揺れた。酔いがまわった体といつてもよりもヒールの高い靴のせいで、バランスを取れない。こける、と覚悟した可南子の背中に亮一の手がまわされる。薄いドレスワンピース越しに、スーツの生地感触と体温。硬い腕で力強く支えられて息が止まった。しかし――

……嫌、じゃ、ない。

知らない男の人と肩がぶつかっただけでも冷や汗が出る。それなのに、今は不快感がない。

「す、すいません」

背後から、亮一を囁し立てる声や手を叩く音が聞こえる。彼は同僚達を一瞥したが、そんなことでは歓声は収まらなかった。可南子はそちらを見られるはずもなく、顔を真っ赤にして俯くしかない。

「ごめんなさい。本当に、すいません」

「相馬さんが大丈夫なら、問題ないから」

予想外に優しい声が降ってきて面食らう。でも、顔を上げる勇気なんてない。

体勢を崩した状態から自分の足でしっかり立つには、亮一の二の腕を掴まないとダメだったので、小さい声で何度も謝罪をしながら腕を借りて立つ。

けれど、急にぐらぐらと視界が歪んできて、可南子は咄嗟に額を手の甲でこすった。先ほどよりも深刻な酔いの症状を認識して青ざめる。

自分らしくない恋愛への憧憬を抑えようと気を張っていたので、酔いがまわるのが遅くなつただけらしい。

アルコールのまわつたこの状況で、すぐ傍に触れられても大丈夫な男の人がいる。背中には腕がまわつたまままだ。恋しかった人肌は、隣にある。

遠くに追いやっていたはずの胸の高鳴りを感じる。

可南子は懸命に頭の中で帰る道筋を辿り続けつつも、男の人を怖がるきつかけとなった昔の出来事を思い出していた。

大学に受かり、父親に一人暮らしを認められたときの浮き足立った気持ちを、今でも思い出せる。一人暮らしに最後まで反対したのはひとつ下の弟だったが、母親も終始、渋い顔だった。

母親は厳しくて、いろいろと制限をかけられた。怪我をすればいけないから部活は文化部。門限は平日は午後八時、休日は六時。バイトは禁止。

だから、父親が家を出て一人暮らしをしてみないか、と提案してきたときは驚いた。大学は、実家から通えなくてもない距離だったが、父親なりに感じる所があったのだろう。

一人暮らしをはじめ、自由を味わい、解放された気分になると、無縁だった恋に興味を持った。恋に恋しているとも気づかず、成り行きで四年生の彼と付き合うことになったのは、五月のこと。初体験は痛いのを我慢するばかりで、その後も苦痛の時間でしかなかった。

すぐにそっけなくなつた彼氏の態度に自分の落ち度を探し、数え切れないほどの溜息をついた頃には夏になつていた。

大学の木々に蝉の音が鳴り響くのを窓越しに聞いていたとき、噂を耳にしたと、友人が言いにくそうに教えてくれた。

『可南子の彼、他の女の子とも、付き合つてるって……』

血の気が引き、耳が遠くなつた。夏なのに、足の指先まで冷たくなつたのを覚えている。

『見たわけでもないから、信じてみる』

可南子の取つて付けたような笑顔に、友人は俯いた。彼を信じたのは、若さゆえの正義感と頑固さだった。それはあつさりと言切られるというのに。

夏休みははじまつたが大学の図書館で調べたいこともあり、実家に帰る予定を延ばしたある日。図書館から帰つた可南子は、小さなワルールの部屋のベッドに、彼氏と見知らぬ女の姿を見た。

彼氏は胡坐をかいた姿勢で自分の股の上に乗せた女の豊かな胸を頬張りながら、下から突いていた。こちらに気づきもせず、汗ばんで一心不乱に女を抱く彼氏を見てぼんやりと、噂は本当だった

んだ、と思つた。彼氏の顔が全く違う人に見えて、現実感がない。立っている可南子に気づいた彼氏が、まず怒鳴つた。堂々とベッドの側で着替える女と、気まずさを隠す為か横暴になる彼氏に、悪いのは自分なのかと可南子は混乱した。自分などいないかのよう、その横を通り過ぎて玄関で靴を履く女を恐ろしいと思つた。

彼氏に上から睨み付けられ『誰にも言うなよ』とすぐまれる。それなのに、妙に冷静な自分だった。感情がこもらない無機質な声が、口からするりと出る。

『鍵を、返して』

その言葉に、彼氏はどん、と乱暴に可南子の肩を押して壁にぶつけ、手で圧迫してきた。じわじわ広がる痛みで可南子は顔を歪める。

『返して、ください、だろ？』

合鍵を渡した自分が情けなくて、涙が止まらなくなつた。

『泣いたからって、許されないだろ』

暴力をふるう自分は強いとか、かっこいいと思つていいのかもれない。何をしてもいい人形扱いをされた気がして、胸をえぐられた。

肩が痛いのか痛くないのかはもうわからなかつたけれど、ただ、冷たくなつていく。

『この家賃を払っているのは父親なの。父親に連絡させたほうがいいですか』

彼氏の顔に怯えが浮かんだ。肩を圧迫していた手が離れてすぐ、力任せに頬を打たれた。目の前が白くなつて、口の中に錆の味が広がる。

『いい歳して、パパ頼りかよ。ふざけんな!』

鍵がフローリングの床に投げつけられた。それはカッンと何度か跳ねて、廊下で止まる。玄関に立っていた女がさすがに慌てた。

『やめなって、殴る必要ないじゃん!』

壁に背中をもたれさせたまま、可南子ははずると床に尻をつく。

『お前みたいな不感症女と付き合ってたんだ! そんな平べったい、面白みのない体を相手にしただけ、感謝しろ!!』

嘲りが動揺した心に届き、根を張るように奥底に沈んでいくのを、ただ感じていた。

ドアが閉まる音がしてかなり経っても、震えてうまく動けなかった。どうにか四つん這いでドアの所まで行き、鍵をかけてチェーンをする。

そして、玄関にあったバッグからスマートフォンを取り出して、震える指先で弟に電話をかけた。『姉ちゃん? 明日じゃなくて今日帰ってくる気になった!? みんな待ってるよ!』

すぐに出てくれた明るい弟の声にほっとしたと同時に、涙が止まらなくなる。さっきのことは現実なのだ。頬も肩も心も、全てが痛い。

それから三十分くらいして、弟と父親が来てくれた。弟が、母親にわからないように父親を連れてきてくれたのだ。弟は可南子の赤く腫れた頬を見て激怒していた。父親も、冷静に見えたが激昂していたらしい。しばらく経ったある日、彼氏からまた何かされるのではないかと恐れていた可南子に、手を打ったから心配はいらないと言った。

何も聞きたくなかったので、どうなったのかは知らない。ただ、彼氏は一切接触をしないまま卒業した。

こうして十八歳の夏から男性が怖くなった。既に七年も経ったのに、彼氏に投げつけられた言葉は胸に刺さったままだ。

月日が流れても、いまだに胸の痛みは突然に湧いてくる。けれど『ああ、また来た』と厄介事として処理できるくらいには慣れた。

三次会会場の店の外には秋の涼しい風が吹いていた。

それを心地よく感じたのは一瞬だけで、可南子の視界は徐々に黒く霧がかかっていく。

……貧血だ。

横には亮一がいる。可南子は歩く速度を落としながらも、気づかれないようにしのごうとしていた。初対面の男の人に送ってもらっている手前、具合が悪いだなんて言いだせない。

だが亮一は可南子の変化にすぐ気づいたらしく、二の腕を控え目に掴んできた。

「あ、あの」

「いいから」

焦る可南子は、道の端に連れて行かれる。背の高い彼の表情は見えないけれど、声は少し緊張しているように聞こえた。

活気あふれる大通りから細い道へ進み、飲食店が入ったビルの壁際で止まる。人通りの少ない場

所で、可南子は亮一の腕を支えに立っていた。壁に突こうとした手を、彼の腕に誘導されたのだ。人通りの多い道で立ち止まらずに済んだとはいえ、恥ずかしい上に情けない。

「すいません、体、お借りしちゃって……」

黒く塗り潰されそうな視界と、頭を揺さぶられるような眩暈。ちゃんと自力で立ちたいのに、まだ立てない。

「無理じゃなくていい」

「本当に、すいません」

亮一の声は聞き間違いかと思うほどに優しい。けれど、早く帰らないと終電もなくなるし、これ以上、初対面の彼に迷惑を掛けるのは心苦しかった。

地下鉄の駅はすぐそこだし、可南子の利用する路線は基本的に空いている。絶対に座れるという確信があった。ダメそうならタクシーを使って帰ればいい。

覚悟を決めて頭を上げると、大きな眩暈がした。

「……っ」

小さく息を吐いて耐えようとしたものの、血の気が引き、力が抜けて座り込みそうになる。

ここ連日、仕事が忙しかったので体調が悪いのかもしれない。

「……ちよつとごめん」

亮一の言葉が遠くに聞こえる。謝るのはこっちのほうだ。だが、謝りたいのに喋ることもままならない。何とか堪えていたが、もうこのまま座ってしまおうと、彼の腕から手を離す。

しかし、亮一の腕が可南子の背中にまわされ、ふわりと抱き寄せられる。彼の硬く厚い胸に寄りかかるような体勢になったのだと理解するのに、数秒かかった。

「し、志波さん……」

「こっちのほうが楽だろ」

「あの……」

想像以上にながしりした体にどきどきする。亮一の胸に耳が当たり、心なしか速い心臓の音を拾う。冷えた耳たぶに、彼の体温が心地よい。

貧血でふらつく頭でも、この状態がおかしいのはわかった。それでも、体を預けていると楽で離れられない。

大学時代の件があつて以来、男の人に体を寄せたことなどなかった。男の人に近寄られると自然と距離を取っていたくらいなのに、亮一は大丈夫だ。

具合が悪くてトラウマが出てくる暇がないのかもしれない。凶々しくも、もう少しだけ体重をかけ、亮一の心臓の音を聞く。すると、不思議と気分の悪さが治まってくる。

「亮一さん、体、硬いです……壁みたいですよ……」

「お役に立っているようで」

亮一の声からは含み笑いさえ感じ取れた。怒ってはいないらしいことに可南子はほっとする。

徐々に眩暈や吐き気が薄らぎ余裕が出てきたので、人肌の温もりを味わうように、深く息を吸った。だが、段々と心地よさよりも、気恥ずかしさと焦りが大きくなる。

広信は亮一を同僚と紹介してくれた。つまり、亮一はIT関連の大企業に勤めているということだ。それでいて見た目もいいこの人に、彼女がいはいははずがない。二次会で女性に話しかけられても興味を示さなかったのが良い証拠だ。

可南子は、彼氏の浮気疑惑に悩んでいた自分のことをまざまざと思い出した。あんな思いを、誰かにさせたくはないし、疑惑を持たれそうな真似もしたくない。

「ありがとうございます。もう大丈夫です」

亮一の体から離れようとすると、背中に腕がまわされて阻まれた気がした。咄嗟に彼を見上げたが、街灯の光が届きにくい場所にいるせいで、表情がわからない。

「あの、胸を貸していただいてありがとうございます。だいぶ良くなったので……。その、これだと志波さん、彼女さんに誤解されてしまうから」

「亮一さん」

「え？」

「さつき、相馬さん、俺のことを亮一さんと言った」

可南子は目をしばたかせる。言ったかもしれない。広信が『亮一』と呼んでいたのが印象に残っていたのだろう。自分の凶々しさに身を縮めて、慌てて謝罪を口にする。

「ごめんなさい！」

「謝ることじゃない」

「ほんとに、すみません……」

可南子は熱くなった頬を手の平で覆ってから、もう一度、体を引く。けれど、背中にまわった腕は離してくれなかった。

心臓がどくどくと大きく打ちはじめる。介抱に、何か違う意味があるように思えてしまう。

「あの」

「とりあえず、また倒れそうになったら困るから、このままで」

そう言われて身動きが取れなくなった。貧血の症状が通り過ぎた後では、ただ抱き締められているみたいで落ち着かない。それに、こんなに優しく扱われることには慣れていないし、恥ずかしい。

「志波さん。送るって、家の方向が一緒なんですか？ とにかく、彼女さんに悪いですから……」

尋ねてはみたものの、広信が亮一へ送るように言ったのは、当然、自分と帰る方向が一緒だからだと可南子は考えていた。だが、亮一は思いもよらない答えを口にする。

「広信は俺が式場のホテルの駐車場に車を停めているのを知ってる。それで、送るように言ったんだ。あと、俺に彼女はいない。……相馬さんは、彼氏に連絡したほうがいいと思う」

車、と可南子は絶句する。挙式があったホテルは都内でもかなり交通の便のいいところにある。

それなのにわざわざ車で来たのか。都内の駐車場代がとて高いことは、運転をしない可南子でも知っていた。いや、車で来るくらいだから、家は郊外なのだろうか。それに彼女がいなければ何故、着飾った女性達に眉ひとつ動かさなかったのだろうか。

いろんな疑問が渦巻いたが、酔いで頭がうまく働かない。

「彼氏に迎えにきてもらえないなら俺が送る。今日は飲んでないから」

確かに亮一からお酒の香りはしてこない。けれど、こんな夜中に初対面の人に車で送ってもらうことに気後れして、可南子は口ごもった。

「彼氏に連絡できそう？」

可南子は亮一の腕の中で力なく首を横に振る。人肌が恋しくても、そんな人を作る余裕なんてない。こんな風に何の抵抗もなく誰かの胸に体を預けられるのは、いつになるのだろう。

「彼氏はいないので、良ければホテルまで送っていただけますか。それからタクシーで帰ろうと思いません」

可南子はホテル前にタクシーが並んでいたことを思い出して言う。

彼氏がないという言葉に亮一の目元がぴくりと動いたが、可南子は気づかなかった。

「私、お酒臭いですし、粗相があつてはいけませんから……」

酔っているのもあつて、ちゃんとした判断ができてるか可南子は不安になってくる。

焦りが濃くなり、亮一から離れようとしたが、彼の腕はそれを許してくれなかった。

「志波さん」

「気分が悪いなら、俺の家で少し休めばいい。車だったら十分もかからない。それともホテルの部屋を取ろうか」

彼が何を言っているのか理解できず、可南子はぼかんと口をあけた。心配してくれているのはありがたいけれど、さすがにおかしいと思う。

焦る一方で、亮一の体温や鼓動は変わらず心地よかった。男の人にこんな気持ちを抱いたのは初

めてで、戸惑いを隠せない。舞い上がりそうになる自分が怖くて、可南子は慎重に口を開いた。

「志波さん、気持ちは嬉しいのですが——」

固辞しようする可南子の言葉尻に、亮一が言葉を被せてくる。

「結衣の後輩で広信とも親しい相馬さんを、下心で部屋に連れ込もうしているわけではないから」
丁寧な口調ながらどこか突き放すようで、先ほどまで高揚していた心が一気に萎んでいく。

自分に魅力がないことは、七年も前から知っている。けれど、胸に痛みが走った。

考えてみれば、こんな女の人に不自由しなさそうな人が、自分なんかに下心を抱くはずがない。

「志波さんにそんなつもりがないのはわかっています」

それに、いきなり見知らぬ酔っ払いを押し付けられて迷惑じゃないほうがいいがおかしい。だが、律儀な彼は友人からのお断りを断れないのだろう。

なら、彼が断れる理由があればいいのかもしれない。そう考えて、可南子は酔いの力を借りて勇氣を振り絞る。けれど声はどんどん小さくなった。

「でも、その、私が志波さんを襲ったら……困ります、よね」

「力で相馬さんに敵わないとは思えない」

恥ずかしくて消えたいくなるとはこのことだ。引かれるのを期待し、決死の覚悟で口にしたのに、亮一にあっさりと言いつ返された。

彼がおかしそうに笑い出して、可南子は耳まで真っ赤になる。

「相馬さんはそういう冗談を言うタイプに見えないから、意外だな」

暗に真面目そうだと言われて、つい反論してしまった。

「じよ、冗談じゃないかもしれないですよ」

「そうか。じゃ、襲われるのを期待して待つている。話の流れ的に、俺の家に行くことで決まりだな」

強引な話の展開に、返す言葉が咄嗟に浮かばなかった。それを同意とみなしたのか、亮一は可南子の背中においていた腕を離す。それからとても自然にウエストに手をまわし、引き寄せてきた。

「あの」

「俺を杖の代わりだと思えばいい。可南子も倒れたくはないだろう。行こう」

笑顔で、当たり前のように下の名前で呼ばれて、呆気にとられる。普通の女の人なら勘違いをするからやめたほうがいと注意をしたくなるが、喉に詰まって言葉にならない。

前から歩いてくる人は、必ず亮一に視線を止めた。何故こんな女が横にいるのだと思われるのだろうか、可南子は俯く。

途中で別れて地下鉄で帰れないかと考えたけれど、亮一をうまく説得できない気がした。やはりホテルまで送ってもらって、タクシーに乗りよう。

亮一に迷惑を掛けているのが心苦しい。それでも、人に寄りかかりながら歩くのは心地いい。

可南子は酔いを言い訳に、ホテルまでの間だけとはと、亮一に少し体を預けた。

目覚めると知らない天井が目に飛び込んできて、可南子は数秒固まった。慌てて上体を起こして

時計を探す。ヘッドボードにある時計は朝の五時を指していた。

いつ寝たのかも思い出せずに、可南子は頭を抱えた。きつと亮一の家泊まってしまったのだ。

しかも彼のセミダブルのベッドを占領して。

「最低……」

可南子は呻く。そして、少しずつ昨日のことを思い返す。

昨晚、ホテル前のタクシー乗り場に足を向け『帰ります』と亮一に主張した。けれど、腰にまわされた手は離れなかった。

『俺の家で休む約束をした』

亮一は啞然とする可南子を、強引とも言えるエスコートで地下駐車場に連れていくと、助手席のドアを開ける。一縷の望みをいだいて彼の顔を窺ったが、目で乗るように促されて終わった。

諦めてお礼を言っただけ乗った車は、すぐに亮一の自宅マンションに着いた。道を覚えられないほどの近さに驚きながらも、これなら少し休ませてもらったら帰れると楽観視してしまった。

勧められるままソファに座ると、酔いも手伝ってお尻に根っこが生える。立ち上がるには、さうどうの覚悟がいるほどに。

亮一はそんな可南子を気にした様子もなく、彼がコンビニに行ってくる間にシャワーを使うように言ってきた。

驚いたが、彼は淡々としていて警戒心を抱かせるものは全くなかった。

親友に頼まれて、介抱しているだけ。改めてそう認識しつつ彼からタオルとTシャツ、ペットボ

トルを受け取ると、緊張が一気に緩んだ。

亮一がいたら、さすがにバスルームを使わせてもらうのは遠慮しただろう。けれど、家の主である彼は可南子を残して出掛けてしまったのだ。じっとしているのも落ち着かない。

美容室でセットした髪には、小さなピンがたくさん刺さっていて、頭皮がずつと痛かった。スツキングは腰の辺りやむくんだ足を圧迫しているし、早く脱ぎたい。

不満を声高に訴えはじめていた体は、温かいシャワーの誘惑に勝てなかった。

亮一は少し長めに買い物をしてきてくれたようで、髪を乾かし終わった頃に帰ってきた。コンビニの袋に入った歯ブラシとメイク落とし、下着を渡されたとき、可南子は完全に警戒心を解いた。

ここまで清々しく下心がない様子だと、女として見られず寂しいとさえ思えない。安心して、かろうじて残っていたメイクも落とす。一日窮屈な格好をしていた為、借りた大きなシャツにほつとした。

亮一がシャワーを浴びに行つたところまでは記憶にある。

でも、自分がいつ寝たかは覚えていない。初めてのお酒の失敗が痛すぎる。すっかり冷静さを取り戻した頭は、昨晚帰るべきだったとききりに可南子を責める。

この寝室に亮一の姿がないのは、ダイニングにあったソファで寝ているからだろうか。あのソファは、彼の高い身長には小さかった気がする。

可南子の眉間に皺が寄つた。せめて今からでもベッドで寝てもらおうと、ベッドから降りて寝室のドアをゆつくりと開ける。

ダイニングは暗く静かだった。部屋のソファの上に人影がないかと目を凝らす。亮一は見当たらない。出かけているのかと視線を動かすと、床に大きな人影があつた。

「っ！」

可南子は悲鳴を上げそうになり、口に手をやる。亮一はフローリングの上で寝ていたらしい。

カーペットがあるとはいえ体が痛いはずだ。迷惑を掛けた自分がベッドで寝ていたことに、心苦しさをいっばいになる。

すぐに仰向けで寝ている亮一の傍に寄つて、彼の体の脇に膝をついた。

「志波さん、ベッドで寝てください」

左の肩に触れると熱かつた。可南子の指が冷たいのか、亮一の体温が高いのか、たぶん両方だろう。その熱さに風邪でも引いてしまったのかと一瞬怯んだものの、再び肩に手をかけ、控え目に揺する。

「志波さん」

亮一は目を開いて、可南子に眠たげな顔を向けた。暗がりの中でもわかる顔立ちの良さに、見惚れる。こんな人の体を壁や杖の代わりにしたのだから、酔いは怖い。二度と飲みすぎないようにしようと心に誓いながら、動揺で引きつった顔を彼に向ける。

「す、すいません、ベッドをお借りしていました。ベッドで寝てください。私、今から帰ります」

亮一の左腕が上がつたので、可南子は傾けていた体を起こした。だが、思いがけずに彼の腕が首にまわされてゆつくりと引き寄せられる。体を支えきれずに、彼の首筋に顔をうずめる形で倒れこ

んでしまった。

暗い中、亮一の男らしい匂いを吸い込んで顔が熱くなる。

「志波さん！」

抗議の声など聞こえないかのようにウエストを抱え込まれ、彼の体の上に乗せられた。全身で感じる、鍛えられた硬い体、熱い体温、呼吸。

体を起こそうとしても彼の腕に阻まれて、叶わない。どきどきと煩い心臓が冷静さを遠ざけていく。

「おはよう」

のんびりとした口調の亮一は、自分の上にしっかりと乗るように可南子の体をまた動かした。可南子の着ているシャツが捲かれて外気に触れた太腿に、硬いものが当たる。

それが何かわからない振りはできず、もう一度体を起こそうとするが、やはり亮一は離してくれなかった。

「ふ、ふざけないで……」

可南子の弱い切った声を聞いても、亮一は腕の力を緩めない。

「襲いに来たようなので、迎えただけだ」

耳に息がかかる近さで囁かれる。記憶を刺激されて、昨夜の帰り道での彼との会話を思い出す。

襲うかもしれないと言った。けれど、引かれる為に勇気を振り絞って言った冗談だ。酔っていたとはいえ、昨晚の自分が恨めしい。

「昨日はごめんなさい。ベッドで寝てくださいって言いに来ただけなの。お願い、離して」

「ベッドで襲うと言いに来たわけだ。なかなか、大胆なお誘いだな」

そう呟いた亮一は、片肘をつけて上体を起こし、可南子の脇と膝の下に腕を差し入れた。

「わっ」

「暴れたら危ないからな」

彼は重さなど感じていない様子で立ち上がり、可南子は抱きかかえられたまま固まる。

あつというまに寝室に続くドアを潜った彼に、自分の体温が残っているシーツにゆっくり下ろされた。

可南子は、素早く体に跨ってきた亮一の冷静な表情にうろたえる。

「具合はどう」

至近距離で見ると彼の切れ長の目は大きくて、絵のように綺麗だった。迫力のある双眸に射竦められて心臓が痛い。可南子は、唇をわずかに開けて短い呼吸を繰り返す。

昨日の夜はそつけないほどだったのに。亮一とベッドの上にいる現実を受けいれられず、可南子は手で顔を覆った。

「お陰様で、もう、大丈夫です」

明るくなりつつある寝室で、彼の体温を肌で感じている。先ほどから心臓が潰れそうに苦しい。おまけに、ベッドの上で聞く声は色っぽく、同じ人の声色とは思えなかった。

昨夜、下心はないと言っていたし、迷惑を掛けられたから、そのお返しにからかいたいのかもしれ

れない。けれど、冗談にしてはすぎている。

「昨日は迷惑をお掛けして、本当にごめんなさい。もう大丈夫なので帰り……」

言い終わる前に、亮一が顔を覆う手にキスをしてきた。柔らかい感触に理解が追いつくより先に、生温かいものが同じ場所を掠める。それが舌だとわかった瞬間、出したことのない声が出た。

「あっ！」

背筋にゾクリと震えが走って、可南子は逃げるようにうつ伏せになり、枕を両手で抱えて顔を埋める。動悸が激しさを増して、苦しい。

「良くなったのなら、よかった」

耳元で熱い吐息と一緒に囁かれ、そのまま耳を唇で食まれた。

「んん」

亮一は可南子の黒髪をすくってよけると、耳の後ろからうなじにかけて唇を移動させていく。下腹の奥のうずうずとした感覚に、可南子はさらに顔を枕に押し付けた。

「息、苦しくないか」

亮一の気遣う声からは余裕さえ感じる。彼はこういうことに慣れていると思うと、ツキンと、胸に痛みが走った。

息は苦しいけれど、亮一に触られるのは嫌じゃない。でも理性が、流されては駄目だと可南子をとせつつく。矛盾に苛まれながらも、肌は期待に粟立った。

「うっ」

亮一に熱い手で太腿の外側を往復するように撫でられて、さらに頬が熱くなる。内側の柔らかい部分に彼の手が移動すると、体はわかりやすく震える。

「し、ばさん」

可南子が弱く亮一の名を呟くと、彼の動きがぴたりと止まった。ほっとしたのも束の間、右脇下に腕を差し入れられ、いとも簡単にころんと横向きに転がされる。

突然視界が開けて、驚きに可南子の目が丸くなった。

「……あ」

「窒息する」

枕から剥がされて息は楽になったが、心許ない。何か縫るものを探す為に動かしただけで背後の亮一に抱き締められて、身動きが取れなくなった。

「お、襲うなんて言って、ごめんなさい……」

可南子の声が緊張で震える。昨夜のたった一言でこんなことになるとは思ってもしなかった。少しの間、唇を引き結んだままの可南子の髪を、亮一が有めるように丁寧に撫でる。

「可南子が謝ることじゃない」

「……」

頭を撫でられるなんて久しぶりだ。次第に強張っていた体が緩んできて、安堵にふうと長い息が出た。

「……俺が楽しみにしていただけだ。やめてほしいなら、やめる」

彼の言葉に心がきゅつと締め付けられる。次に拒めば亮一はもう触れてこないだろう。でも、そうなるときつと寂しい。

「嫌なら、拒んでくれ」

拒まないでほしいという気持ち伝わってくる声だった。勘違いかもしれないのに、また息苦しくなる。

亮一は強引な所はあるけれど、可南子を傷つけることはない。逞しい腕に似つかわしくない繊細な触れ方をする。

「私……」

この優しい人に抱かれてみたいという思いが強烈に湧き上がった。どくん、と心臓が大きく打つ。披露宴会場での、亮一の女の人への態度からは、付きまとわれるのを嫌っている印象を受けた。

抱かれても彼の特別になることはきつとない。それでも、過去から前に進むきっかけが欲しい。

可南子が逡巡していると、彼は雰囲気を少し和らげた。

「やめるか」

亮一は可南子が拒むことを前提に、はいと答えやすいように質問を変えてくれる。強引なのにどこかフエアで憎めない。

「あ……」

可南子はこくり、と生唾を呑み込む。

「あの、キ……」

やめない、と答えればいいだけなのに、キスしてくださいと言いかけて黙った。何故そんなことを口走りそうになったのか、自分でも全くわからない。

可南子が顔を青くしていると、亮一は肘をついて心配そうに覗き込んできた。

「気分が悪いなら薬を持ってくる。二日酔いか」

可南子が上を向くと、鼻が触れ合うほどの近さに彼の顔があった。気遣いの色を湛えた目が、可南子を見つめている。

「……大丈夫……」

昨日会ったばかりなのに、どうしてこんな目を向けることができるのだろう。

気づくと、可南子は衝動的に亮一の唇に自分の唇を重ねていた。硬そうな体からは想像もできないほど柔らかい。唇を離すと急に恥ずかしくなって、彼の顔を直視できないまま顔を伏せた。

顎を掴まれたかと思うと、顔を斜めにした彼が近づいてくる。一瞬のことで、目をつぶることもできない。

「う、んっ」

彼の唇に押しされて、枕に頭が沈んだ。漏れる息も全て捕らわれていく。入り込んだ舌に歯列や上顎を撫でられて、甘いお菓子を食べたみたいに顎がぎゅつと痺れた。

「ふっ……う」

激しさに目の前がチカチカする。彼の肩を押し返したが、びくともしない。

こんなキスは初めてで、口の中を侵す熱い感触にぼうっとなり、呼吸をするのがやつとな状態に

なった。

「可南子」

また下の名前を呼ばれて、可南子の頬は薄らと色づく。こんなキスの後では、特別扱いをされている気がしてしまう。

「さっきの、なし」

「さっき……?」

「やめられない。だから、痛かったら言ってくれ」

亮一は可南子のシャツを捲り上げた。サイズが大きかったせいでとても簡単に脱げてしまい、身に着けているものはブラとショーツだけになる。彼が息を呑んだのがわかった。

「ま、待って……!」

可南子は慌ててブラの上から腕で胸を隠した。亮一の焦げ付きそうなほどの視線を感じる。

いざ抱かれるとなつて、本当にいいのか迷いが出た。数年ぶりで、うまくできるのかもわからない。

迷いに気づいたのか、亮一は可南子の耳朶を指でくすぐるように撫でてきた。こそばゆくて、気持ち良い。

「……優しく、する」

亮一の真剣な眼差しに誘われて小さく頷くと、彼は嬉しそうに微笑んだ。たったそれだけなのに嬉しくて、迷いは消えてなくなった。

頬に触れられながら落とされたキスは、先ほどの激しいものとは全く違った。亮一の鍛えられた筋肉質の体からは全く想像できない、柔らかい唇。

やがて、下着の上から脚の間を触られると、蕩けていた気持ちが固くなった。

「あのっ」

「力を、抜けるか」

彼は肩に唇を落としてきた。彼の息に肩を愛撫されている気がする。先を急ごうとしない様子が、息を詰めていた可南子に呼吸を思い出させた。

「は、はい」

素直に返事をした可南子に、亮一はおかしそうに目元に笑みを浮かべる。

「痛かったら、言えよ」

「はい……」

亮一はまた笑みを浮かべて、下着の上からまだ芽吹いていない敏感な場所を弄った。

痛みとはちよつと違う不思議な感覚が腰の辺りにじんと広がって、可南子は無意識に膝をこすり合わせる。すると彼はショーツに手を掛け、躊躇いなく爪先から引き抜いた。

「あのー!」

「……肌、本当に白いな」

いきなりのことに固まったせいで、脚を閉じようとしたが間に合わない。

太腿の裏を手で押し上げられ、その間に亮一の顔が沈んでいく。自分でも見たことがない場所をじっと見る彼の目には、疑いようもない欲情が灯っていた。

「み、……見ないで」

「なんでだ。綺麗なのに」

そこに彼の熱い息を吹きかけられ、可南子は悲鳴に近い声を上げる。

「き、汚いです！」

「シャワー、浴びただろ」

「そ、それは、きのう！」

「汚くない」

脚を左右に押し広げられ、まだ膨らんでいない敏感な芽を、亮一の舌で探り当てられる。

「んあっ」

痛くはない。けれど、変な感じだった。唾液をたっぷり含ませながら唇で啄まれる度、体がぶるっと震える。

「ひあ……うっ……」

彼の唾液が割れ目を伝って落ち、シーツを濡らした。それをお尻の下で感じつつ、可南子は手の甲で口を押さえて声を我慢する。

恥ずかしいばかりだった刺激が、しだいに甘い熱に変わっていく。舌で捏ねられると、気持ち良さが鮮明になってきた。

「声、我慢するな」

膨れはじめた芽に、ジュツと吸い付かれる。鋭敏な刺激がゾクツと背骨を駆け上った。

「あ、いや……っ」

口から漏れるのはいや、という言葉なのに、どこか甘ったるく響く。舌で転がすみたいに芽を舐め続けられ、背中が弓なりに反った。

「濡れたな……」

亮一は顔を離し、すっかり硬くなった芽を親指で押さえながら、蜜をまとわせた中指を割れ目に埋め込んだ。息を整える暇も与えてもらえない。

するすると彼の長い指を呑み込んでいくそこに、可南子自身が驚く。

「ンンッ、あ……っ」

すっかり自分の蜜で潤っていた中は、彼の指をしっかりと啜える。しかも、きゅう、と締め付けた。

「……んっ」

「力を、抜いとけよ」

すぐに馴染んだ指は、内側の壁をゆっくりと時間をかけて探りはじめる。傷つけないように優しく、最初は浅く、徐々に深く。

可南子の息は乱れ、体は勝手に彼の指を受けいれやすい角度にくねる。まるで、快楽の中に溶け込んでいくみたいだった。

「あ、あ、ンツ。はあ——」

亮一の指が中をくまなく撫でまわす。指先がお腹側を掠めると、可南子の体が震えた。明らかに他と違う敏感なそこをまた擦られて、堪えきれず腰が跳ねてしまう。

「あッ」

「ここか」

手の腹で芽を押さえられ、そこを執拗に捏ねられると、可南子は大きな波に運ばれるように、とんとんと高みへの階段をのぼりはじめる。

「あ、んっ、んっ……ふあっ」

「いい声だ」

媚薬同然の亮一の声に頭がぼうつと痺れて、あれこれ考えることをやめた。

このまま身を委ねるから、高まった悦を弾けさせてほしい、そんな思いを抱いて亮一を見ると、視線が絡まる。

彼は指を動かしつつ体を起こし、可南子の背中に手をまわして胸からブラジャーを素早く取る。頂きを尖らせた小ぶりの胸が亮一の眼下に晒された。

「あっ」

「白く……」

亮一は感嘆するように息を吐き、可南子が腕で隠す前に、桃色の頂きを口に含んできつめに吸う。快楽の後押しは、あっけなかった。

「ふッ、あッ、ああっ……っあ……」

あっという間に絶頂に持ち上げられて、可南子の内側は亮一の指をビクビクと締めつける。

「いったか」

呼吸を整える可南子の耳元で、亮一が囁いた。初めて達した可南子は倦怠感に呆けたまま、返事の代わりに彼の顔へ頬を傾ける。

髭の感触がざらりとして少し痛い。けれど、彼が傍にいる実感に、不思議と満たされた。

「……これ以上、煽るなよ」

亮一は指を抜いて、溢れた蜜を塗り広げていく。そこは滴った蜜で既にぐっしよりと濡れて火照っていて、指がなめらかに滑った。

ちりちりする感覚に奥がうずき、気持ち良さに息を吐くと、胸の頂きに歯を立てられる。

「んっ、ふっ……あ」

痛みと快感の中間の感覚が、つんと体の奥に響いて、もっと欲しいと懇願するように胸を上げてしまう。可南子の反応に亮一はくっつくで喉で笑い、抜いていた指をまたずっと挿し入れた。

「ああっ」

いちいち反応してしまう自分の体が恥ずかしい。背中にじつとりと汗が滲む。充分緩んだ場所に二本目の指が入ると、可南子は異物感に一瞬だけ怯んだ。

「力を抜いて」

「んっ」

彼の言葉を聞いて体の力を緩める。それを確認すると、ゆっくりだった指の動きは次第に速くなった。それに反応して、可南子の喘ぐ声も大きくなる。

「……ッ……あつんっ……あ、あつ」

ぐちゅぐちゅという音は、自分が彼を受けいれている音だ。蜜を零し続け、もっと深くに彼を誘おうとしている。自分の声や淫らな水音に耳を塞ぎたいのに、シーツを掴む手は動かない。彼の熱を帯びた目に自分だけが映っているのを見たら、あの弾けそうな感覚が近づいてきた。

「あ……っ」

亮一の指は可南子が反応する場所を執拗に突いてくる。熱の階段を駆け上がっていく可南子の目の前に、真つ白な世界が広がる。

「んあつ、は……」

息が止まるような何かが走り抜けて、中がどくどくと亮一の指を締め付けた。二度目の虚脱に重い体をベッドに沈ませると、彼に抱き締められる。

「大丈夫か」

硬い体とは正反対の、柔らかく気遣う声。それが心の中にすんと入りこんで、目尻に涙が滲んだ。自分はまだ酔っているのかもしれないと思いつつ、彼の体の下で細い息を吐く。

「だい、じょうぶ」

「よかった」

亮一は可南子から体を離すと、ヘッドボードの棚にある箱の中から小さな四角いビニール袋を取

り出した。彼が持っているものが何かは、すぐにわかった。避妊を考えてくれたことにとっても安心すると同時に、当たり前のようにベッドの傍に置いてあったことに心がざわつく。

唇を引き結んで息を潜めた可南子の頬を、亮一が手の甲で撫でてきた。鎧を着込みはじめていた心がすぐに綻ぶ。

「俺の子を、産んでくれるのか」

「なに——」

突拍子もない発言に、何を言っているのという言葉が喉に詰まった。

「何か、避妊具が嫌そうに見えた」

他の人の存在を感じただけです。そんなことを言えるはずもなく、可南子は首を横に振る。

亮一は避妊具を持ったまま眉間に皺を寄せていたが、何かに気づいたように険しい顔を緩ませた。

「これは昨日、コンビニで買った」

コンビニで女性用下着と一緒に買ったという意味だろうか。何とも言えぬ恥ずかしさに、じわじわと可南子の頬が熱くなっていく。

「それに家に誰もいれたことはない。勘違いされ——」

「か、勘違いするつもりはないです！」

これは今日だけのことで、亮一を束縛するつもりはない。けれど、彼の口からそういった話を聞きたくなくて、言葉尻に被せた声が大きくなる。胸の痛みを堪えつつ息をついた唇に、噛みつくような視線を感じた。

「……？」

次の瞬間、亮一に手首を掴まれシーツにきつく縫いとめられる。怒った顔をした彼と目が合った。無言のまま唇を重ねられ、可南子は目を閉じる。

「ふうッ……ン」

滑り込んできた舌に、体は素直に火照りを取り戻していく。彼の硬い手に胸を覆われ、指の間で頂きを挟まれ、舌をきゅつと吸われた。蜜がまたとろりと染み出したのがわかる。

「勘違いしろよ」

肌を重ねながらの言葉は、とても甘く聞こえた。亮一は会ってからというもの、ずっと勘違いさせるような態度を取ってくる。でも、肝心な言葉は絶対に口にしない。

「そんな顔、するな……」

「顔……？」

どんな顔をしているのか、鏡がないのでわからなかった。亮一は目を細めた後、無言で着ていた服を脱ぎ捨てる。現れた硬く縮まった彼の筋肉に、可南子は息を呑む。脂肪の見当たらない体躯を目の当たりにして嘩然とした。

「あの」

迫力に気圧されて、押しやるみたいに彼の肩へ触れる。亮一はその手首をちらりと見やった。

「……抱いていいか」

熱情を抑え込んだ声はざらりとしていた。手から力が抜ける。代わりに、お腹の底にとくどくと

期待が渦巻いた。

亮一は可南子の膝の裏に手をいれて持ち上げ、脚の間に避妊具をつけた尖端をあてがう。ぬるぬると擦り付ける動作の合間に、つぶりと蜜口を広げられた。

「あ」

「……すぐに、気持ちよくする」

濡れて蕩けたそこに迷いなく押し込まれる質量は、今まで経験したことがないほどだった。じりじりと蜜路を押し広げながら入ってくる大きさに、可南子は喘ぐ。

「待………っ」

「待てない……。悪い」

ゆるゆると腰を進める彼は、動きを止めようとしなない。その代わりに、可南子の汗ばんで額に張り付いた髪をすくってくれる。

「あ……」

「痛いかな」

「ううん……」

彼は恋人に向けるような優しい表情を浮かべて、わずかに笑んだ。唇がどちらからともなく重なると、また力が抜ける。

おそろおそろ彼の肩に手をまわして、唇の形を探り合うキスに目を閉じた。中に入ってくる質量を感じて吐き出した息が、彼の唇にかかる。

「……入った」

キスに溶けながらの挿入。熱情に浮かされ溺れてしまいそうな、甘い時間。終わらせたくない心が言っている。

彼は腰を引いて、ゆっくりと打ち付けはじめた。

「あ、んッ」

達した余韻に痺れていた体は、亮一の律動に反応して、すぐに爪先まで快楽を巡らせる。彼の動きに合わせてベッドは軋み、可南子の口からは堪えきれない声が漏れた。

「あっ、あっ……あっ」

結合は深く、引いては奥を撫でられる。ぬちぬちという粘着質な音が、部屋に甘く響く。彼はわざと音を立て、楽しんでる様子にも見えた。

「んっ、あっ……、や、あっ、ふあっ」

亮一はゆっくりと確かめるように中を捏ねまわしては、切なげに息を漏らす。眉間の皺は、彼も少しは気持ちが良い証拠なのだろうか。

……一晩きりの相手にこんなに優しいなんて、モテるだろうな。

自分を守る為の自嘲は、快楽から少しだけ気持ちを引き離した。

亮一が腰を動かす度に、宙を舞う自分の膝下が目に入る。一昨日、丁寧に施したラメが入った薄ピンクのペディキュアが揺れていた。

これが終われば、彼とはきつと二度と会わない。だから、奔放な自分でいられる。

そのとき、パンという腰を打ち付ける音と一緒に、最奥に尖端が当たった。優しくつついた抽送が突然激しくなり、可南子は現実に戻される。

「だから、俺を、見ろ、って」

頬を両手で包まれて、熱と焦燥が宿った亮一の目に射抜かれた。

「ご、ごめんなさい」

「違う。……俺が悪い」

亮一に腕ごと強く抱き締められて安堵の息をつく。後悔の滲んだ声を聞きつつ目をつぶると、彼の高い体温と呼吸しかわからなくなる。

亮一は最奥を突いた後は動かず、髪をゆっくりと撫でてくれた。彼の指がこめかみを掠め、くすぐったさに小さく身を振る。それを繰り返していると、全身が熱くなり、中がひくひくと蠢いた。

「……動いたな」

体のことか、中のことなのか。含み笑いで答えを察したが、わからないふりをする。

亮一が再びゆっくりと動きはじめ、押し込まれる彼の高ぶりを体中で受け止めた。

「可南子」

名を呼ばれても、呼び返す勇氣はない。切なさを感じる間もなく、律動の間隔が短くなる。啼かされる声、汗ばんだ肌、滴り続ける蜜の水音。彼を受け入れる体はどこまでも淫らで、本当に自分なのかどうかさえわからない。

「イけるか」

脚の間に滑り込んだ彼の手に、膨らんだ粒を軽くこすられた。

「ふ……ッ、あっ」

あっけなく達した可南子に、亮一は羽のようなキスを顔に幾つも落とす。「少しは、良いか」

少しどころか、とても。そう思いつつ、彼の目を見ながらおずおずと頷く。心の奥底で、ずっと欲しかったもの——恋人に大事にされる夢を、彼は見せてくれている。

……どうして、こんなに優しくしてくれるの。

それを聞いたらお終いになってしまいう気がして、可南子は疑問をぐつと心の底に押し込んだ。

代わりに、彼に与えられる愉楽に背中を押されるように口を開く。

「あの、志波さんも、い、良い？」

はしたない問いも、今日だけだと思えば口にできる。でも、彼の驚いた顔を見て、恥ずかしいことを口にした実感があとからついてきた。

「可南子、今日の予定は？」

「……特には」

三連休の初日にあつた結婚式だったので、まだ休みは二日ある。

「なら、ここに二泊だ」

彼はベッドに手をつけて上体を起こし、可南子のウエスト部分を抱えた。ぱんという腰を打ち

付ける音に、くらくらするほどの劣情を感じる。

「はっ、あ、あんっ」

「俺は、すぐく、気持ち良い」

激しい律動の合間、呼吸交じりの囁きに気持ちを押し上げられた。大きな手で腰骨の辺りを掴まれるのにさえも、気持ち良さを感じる。

「あ、や、ああ、ん、は……」

「あ、や、ああ、ん、は……」

亮一は可南子の腰を抱えていた手を離し、そのまま両腕をついてのし掛かってきた。刺激される

場所が変わって、また声を上げてしまう。

「し、ばさん、もう、だ、め」

「俺も」

亮一に花芽を弄られながら、劣情をぶつけられる。突き上げられて、可南子はいよいよ何も考えられなくなった。

「あっ……」

やがて、意識が浮遊した。一気に緩む体と、ひくひくと動き続ける中。何度か腰を押し付けられ、彼が小さく痙攣する。

「可南子……」

目を逸らすことなく名を呼んでくれる声が、耳の奥に残った。

もったいないくらいに幸せな時間は、きつと前に進む力になる。

少しうとうととしては、彼に揺らされて目が覚める。それを繰り返していたら、明るかった部屋はいつの間にか薄暗くなっていた。

体中が軋こんでいるし、瞼まぶたが重くて目を開けていられない。どうにかこじ開けると、掛け布団を体に掛けてくれる亮一の筋張った手が視界に入った。

可南子起床することに気づいていない彼を盗み見る。眉間に皺しわを寄せた彼の思い詰めたような横顔に、ぎゅっと目を閉じた。

……今だけ。

可南子は離れる彼の手をそっと掴んだ。

そして、この熱さをちゃんと覚えておこうと思いつつ、すうっと眠りに落ちた。

2

『おはよう。体は大丈夫か』

朝一番に来た返信に困るメールを読んだ後、可南子は自分の顔を鏡で見た。

朝なのに顔が疲れている。おまけに、体がだるい。時計の針はどんどん進んで、出勤する時間が

近づく。

クローゼットを開けて服を取り出す。黒のタックカットソーに、センターラインの入ったグレーのパンツ。無意識だったが、気分を表す色合いを選んでいた。

ただでさえ白い肌が青白く見えるので、チークと口紅で誤魔化すみたいに化粧をする。鎖骨までの艶つやのある黒髪をひとつに縛り、耳には小ぶりのコットンピアスを付けた。すると、鏡の中の自分が見られるようになる。

服や化粧にあれこれ悩んだつもりはなかったものの、もう家を出る時間だ。気合をいれる為に、いつもは避ける七センチのヒールの靴を選ぶ。

「よし」

スッキリしない気分を払おうと、背筋をピンと伸ばした。しかし、玄関を出て鍵を出したとき、急に昨晚のことを思い出す。

亮一は二泊した可南子を、マンションのエントランス前まで送ってくれた。車だったこともあって、ここで良いというお願いを彼はすんなり聞いてくれた。

車から降りてほっとしていた可南子の手の平に、亮一はジーンズのポケットから銀色の鍵を取り出して載せる。何の鍵だろうと首を傾げた可南子に、彼は笑んだ。

『俺の家の鍵』

車の中で連絡先を聞かれたことにも驚いたのに、さすがに固まってしまふ。

『あの』

『また、連絡する』

驚きすぎてどうすればいいかわからない可南子を置いて、亮一は車を発進させた。そこまで思い出した可南子は自分の頬を軽く叩き、家の鍵をかけて足早に駅へと向かう。今でも元彼に投げ捨てられた鍵の残像が、ふいによみがえる。合鍵に、良い思い出はない。鍵を渡されたということは、呼んだら来ると思われているのだろう。あれだけ痴態を晒したのだから、そういう女だと認識されてもしょうがない。

自分の浅はかな行動を悔やむことを、昨日からもう何度も繰り返し返している。

出勤途中、亮一へのメールの返信や鍵についてばかり考えていたせいで、男の人とすれ違いざま肩がぶつかり、冷や汗が滲んだ。そこでまた、何故亮一は大丈夫だったのかと悩んでしまう。

『大丈夫です。鍵を返したので、会えますか』

そう返せば終わりなのに、たった一行のメールを送れない自分が、わからない。

会社に着いた可南子は、社内の人に挨拶をしながら自分の机に手を掛ける。三連休明けのオフィスは、皆、始業ベルが鳴ってもエンジンがかからない様子で、気だるさに満ちていた。

可南子にも既に週末のような疲れがある。溜息をつくとき、経理に提出する伝票をクリアファイルに入れて席を立った。

担当者に提出を終えて戻ろうとしたところで、声を掛けられる。

「可南子、おはよう！」

声の主の早苗は、机に並べてあるファイルの上から、好奇心丸出しのキラキラした顔を覗かせていた。早苗は可南子が亮一と一緒に帰ったことを知っている。無視もできず、可南子はぎこちなく笑みを浮かべて近寄った。

「早苗、おはよう」

「手短に言うよ。私が男狙いで三次会に行ったことを、二次会参加の先輩方は知ってるでしょ？朝から先輩方に、コンパできるか……つまり、あの人を呼べるか聞いてみてって頼まれたの。結衣さん側の招待客だけど、新郎の同僚だからって」

先輩というキーワードから、『あの人』が亮一を指しているとすぐにわかった。ぎゅっと掴まれたように心臓が痛む中、可南子は答える。

「広信さん……えっと、結衣さんのご主人は、確かに彼を同僚って言ってたね」

「私も緑山さんと会う機会を作りたいし、聞いてみるつもり」

「緑山さん……？」

「……相変わらず男に薄情ね。三次会で緑山ですって自己紹介したでしょう、彼」

「あ、すいません」

一緒にテーブルにいた人の名前を忘れていた手前、薄情と言われても否定できない。そのときには既に酔っていたのだろう。

あの日のことは後悔ばかりで、あまり振り返りたくなかった。可南子は空のクリアファイルを弄りながら、この場を去るタイミングを探る。